

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	山梨県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	塩山市立井尻小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	12
児童数	20	23	22	21	24	26	1(4年)	137	

研究の概要

1. 研究主題

<p>「意欲的に取り組み，自ら追究する児童の育成」 ～ 個に応じた学習指導方法の充実を通して ～</p>
--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・ 1・2年生：生活科 これまでの研究成果を生かし，さらに研究を深め「生きて働く学力」を身に付けるようにするため ・ 3～6年生：算数科 児童の理解の状況に差が出やすい教科であるため
--

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 「意欲的に取り組み，自ら追究する児童の育成」 ～ 個に応じた学習指導方法の充実を通して ～</p> <p>研究の見通し</p> <p>思考力・表現力・理解力を一人ひとりに身に付けさせるためには，自らの手で追究し「わかった」「できた」という成就感や満足感をすべての子どもに経験させることが何より重要である。そうすることにより，学ぶ意欲も高まり「生きて働く基礎学力」の向上につながっていくと考える。児童一人ひとりの実態に応じた学習指導方法の工夫・改善など，きめ細かな指導体制の充実をはかり，さらに意欲的に自ら追究する児童を育成したいと考える。</p> <p>研究仮説</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>算数科・生活科において，児童の実態に応じて学習指導方法を工夫し，一人ひとりに成就感，満足感を経験させることができれば，学習意欲が高まり，生きて働く基礎学力を向上させることができるであろう。</p> <p>「学習指導方法の工夫」</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども一人ひとりの実態の把握 算数科における指導の個別化，生活科における学習の個性化 TTの導入 個に応じた指導のための教材開発 <ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎的基本的な内容の確実な定着をはかるための教材開発 ・ 子ども・学校・地域の実態に即した特色ある教育課程の編成 </div>
--------	--

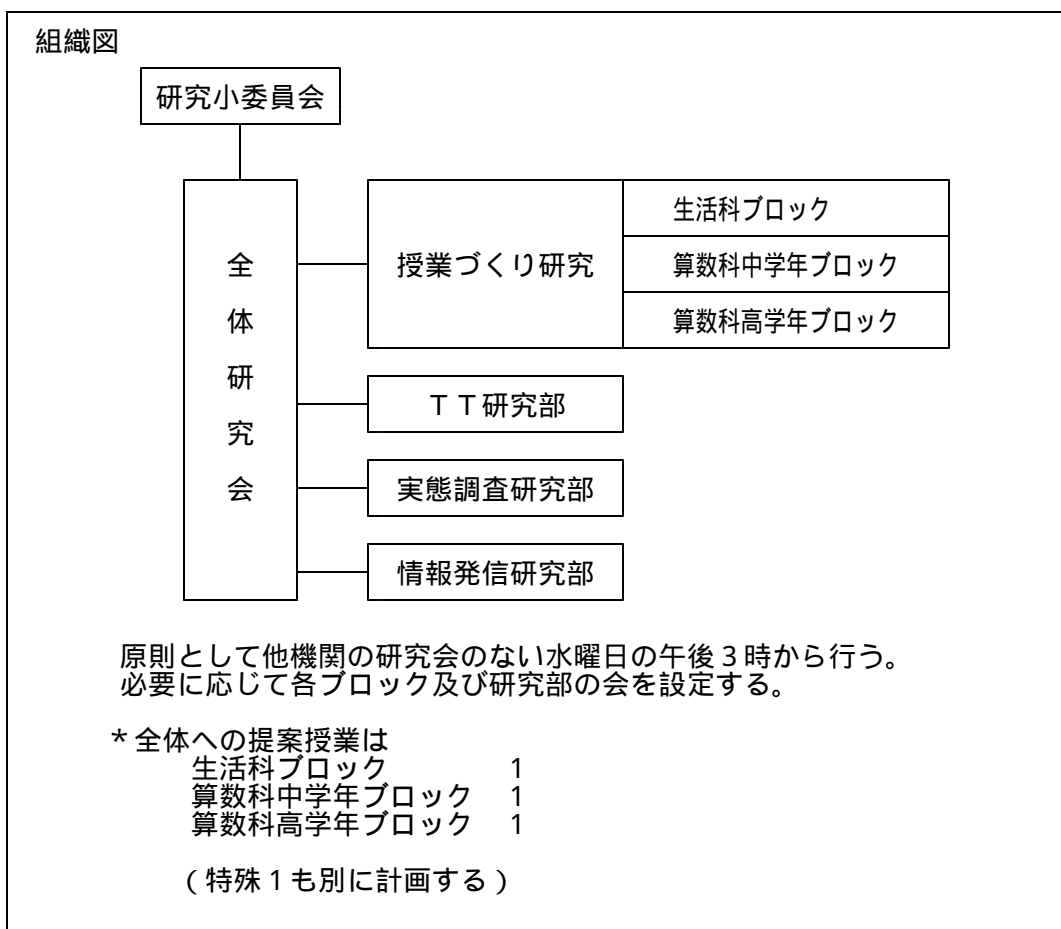
	<p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 教師の共通理解 育てたい子ども像 身に付けさせたい学力 子どもの願い，保護者の願い，教師の願い</p> <p>(2) 理論研究 学力，基礎・基本とは 学習意欲を高めるための手だてとは T Tの指導法の学習 課題別学習，習熟度別学習の進め方</p> <p>(3) 実態調査 児童・保護者の学習及び生活に関する意識等の調査</p> <p>(4) 個に応じた学習指導方法，指導体制の工夫・改善 1・2年：生活科においてのT Tの実施 3～6年：算数科においてのT Tの実施 個に応じた指導のための教材開発 ・基礎的基本的な内容の確実な定着をはかるための教材開発 ・子ども・学校・地域の実態に即した特色ある教育課程の編成 T Tの実施 ・指導計画作成の段階で教師間の役割を含めた指導方法及び学習内容の検討とその時間確保 ・課題別・習熟度別等の学習の実施 評価を生かした指導方法の工夫・改善 指導に生かせる評価（指導と評価の一体化） ・評価規準の見直し ・肯定的評価の重視 ・ポートフォリオ評価の活用</p> <p>(5) 地域人材の効果的活用をはかる</p> <p>(6) 井尻小のT Tの授業形態の模索</p>
--	--

平成16年度	<p>テーマ 「意欲的に取り組み，自ら追究する児童の育成」</p> <p>研究の見通し T Tを生かしたコース別学習・課題別学習等を行い，基礎的基本的な内容の確実な定着をはかり，一人ひとりに成就感，満足感を体験させ共に考え学びあう喜びを味わわせることにより，学習への意欲が高まり，生きて働く学力を向上させることができるであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 個に応じた学習指導方法，指導体制の工夫・改善 1・2年：生活科においてのT T実施 3～6年：算数科においてのT T実施 個に応じた指導のための教材開発 ・基礎的基本的な内容の確実な定着をはかるための教材開発 ・子ども・学校・地域の実態に即した特色ある教育課程の編成 T Tの実施 ・単元の指導計画作成の段階で教師間の役割を含めた指導方法及び学習内容の検討とその時間確保 ・コース別・課題別等の学習の実施 評価を生かした指導方法の工夫・改善 指導に生かせる評価（指導と評価の一体化） ・評価規準の見直し ・肯定的評価の重視 ・生活科におけるポートフォリオ評価の活用</p>
--------	--

・算数科におけるノートの活用
 (子どもたちに、1時間1時間ごとに授業の感想をまとめるように指導し、累積していく。教師にとっては授業評価になり、児童にとっては自己評価となり、子ども自身学ぶ過程を重視する姿勢が身に付いていく。)
 発展的な学習の位置づけ

- (2) 地域素材の教材化をはかる(地域に根ざした教育課程の編成)
- (3) 地域人材の効果的活用をはかる
- (4) 井尻小のT Tの授業形態の確立

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 共通理解として

「確かな学力」

知識や技能はもちろんのこと、それに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものとする。

知識や技能を十分に身に付けていたとしても、「自ら学び自ら考える力」が育っていないければ、その知識や技能は有効に機能していないことになる。さまざまな力が複雑に関連し合っていることを意識し、総合的にバランスのとれた質の高い学力を身に付けさせて行かねばならないと考える。

「基礎・基本」

「生きる力」とは人間の知・徳・体の全面にわたる力であり、これの育成に教育課程のすべてをかけてその実現に努めなければならない。この「生きる力」を育てる上で必要不可欠なものが基礎・基本である。

この基礎・基本を内容面からみると「身に付けるべき知識や技能」であり量的にとらえられるものである。剥落することのない「確実な定着」をはからなければならない。また、能力面からみると「意欲」「思考力」「学び方」などであり「課題に対処していく力」ととらえ、その質を重視していくことが必要となっている。

(2)授業の改善として

TTによる授業

本校がTTを導入した大きな理由は、子ども一人ひとりを複数の指導者の目によってみとり、子どものよさを引き出し、個性を十分に伸ばしていこうとすることである。個に応じたきめ細かな指導が可能になり、子どもの基礎学力の定着をはかるとともに、学ぶ楽しさを子どもたちが味わえるようにするためである。

TTの授業は、3～6年の算数科、1、2年の生活科で4月から実施してきた。算数科では1学期は授業の主な進行をT1が行い、学習の見通しが立てられない子にT2が指導したり、単元によってT1とT2の役割分担を交替したりするなどした。机間指導は、担当する子どもを決めて回ったり、担当を特に決めず見通しの立てられない子どもを指導したりする等いろいろな形態を模索してきた。研究を深める中で、T1とT2ができるだけ絡み合うことの必要性を知り、互いに遠慮することなく児童の実態にあった指導を進めていくことの大切さを確認した。

また、生活科では課題、興味・関心別のグループを編成したり、地域の人材を活用し学習ボランティアと一緒にその指導にあたったりしている。

- その結果として、
- ・複数教師による児童の見取りは複眼的かつ多面的で、より確かに個々の児童の実態を捉えることができ、その共通理解と連携により、個に応じた指導に有効である。
 - ・子どもの興味関心や理解のはやさ、スタイルなどの実態、また単元や学習過程によって柔軟かつ多様な指導形態が考えられる。
 - ・TTを導入したことにより、机間指導やノートのチェックなどを通して学習状況を把握し授業を進めることができるとともに、授業展開のバリエーションが増え、子どもたちも次はどんな学習をするのだろうと楽しみにしている。
 - ・わからないままていることも少なくなり、学習に対してより積極的になってきている。

以上のような成果がある。今後も具体的な活動の場面で生じた疑問やとまどいにきめ細かに対応し、TTのよさを生かして学習の充実に努めていきたい。

理解を深める段階での学習スタイルの選択

個に応じた指導を行うにあたってコース別学習を一部にとり入れた。本校のコース別学習は習熟度に応じて行うものではなく、授業における原理獲得後の理解を深める段階で、子どもの自己判断のもと、自分にあった学習方法を選択するというものである。

- 実施にあたっての基本的な考え方としては、
- ・どんな学習をするコースなのかの説明を受け、自己の判断のもとにコースを選ぶ。
 - ・コース別学習は、一人ひとりに応じた学習を一層進めるものとする。
 - ・コースは固定されるものではなく、自分の学習状況によって変更できる。
- とした。

【じっくりバッチリコース】

友達と考えを出し合いながら細かいステップで、じっくり考えるコース

【すらすらガッチリコース】

友達と意見交換しながら自力解決学習を中心に取り組むコース

コースに分かれることで、理解に時間がかかる児童も授業の中でフィードバックする時間を確保することができ、個人差に対応することができた。また、この学習形態で学ぶことで、一人ひとりが安心してじっくり問題に取り組めるようになってきている。

(3)学校体制として

朝の学習(朝のチャレンジタイム:通称「朝チャレ」)の設定

6月より授業前に全校児童が落ち着いて学習に取り組む時間「朝のチャレンジタイム」を新たに設定した。内容は各学年の実態に応じて、プリント学習や漢字練習、読書等、自由に設定できるものとした。この時間のねらいは、

- ・学習の習慣づけ
- ・学習したことの定着をはかる
- ・自らの学びを広げる

の3つである。各担任はプリントのみならず漢字ノート、読書等、いろいろなバリエーションを組み替えるようにしている。短い時間ではあるが学習へのリズムができ、スムーズに授業へ入っていくことができ有効であった。

これからも子どもたちが楽しみながら続けていけるようにしたいと考える。

教具について

授業計画にそって教具もT1、T2が相談しながら分担して作ってきた。作った教具は、資料室に算数教具の学年別整理棚を設け、そこに保管しておくようにしている。学年間での使い回しもでき大変有効である。

また、生活科では教師の教材研究の要としての生活科マップをリニューアルし、さらに大型生活科マップを作成し壁面に掲示した。地域の主要な建物や畑の作物などを写真や絵で示し、地域の様子が一目でわかるようにした。子どもたちは、活動や体験、自分とのかかわり等を付箋紙に書き込み、この大型マップに貼り付け活用している。

情報収集

少人数指導、習熟度別指導等について学習したり、先進校の公開に参加したりし還流報告をした。また、資料として学力向上にかかわる新聞やテレビ放送の内容をまとめ「校内フロンティア情報」を発行し社会の動向を知り合うようにした。

2. 今後の課題

TTにかかわって

TTによって子どもに手をかけ過ぎてしまう傾向があるので、支援すべき時はいつなのか、どういう方法がいいのか、待つべき時は待つように、もっと効果的支援について研究していき、教師の役割をしっかりと認識し自覚していきたい。また、TTの打ち合わせ時間を設けたがなかなか話し合いができなかった。そこで、単元の指導計画立案時に十分な打ち合わせをするということ、さらに、指導と評価の一体化を意識したTTの指導の履歴としてのTTノートを作り、活用していきたいと考える。子どもたちの反応、理解の様子、意欲等を授業後にT1、T2が語り合い、TTノートへ記入できるとよい。

また、それぞれの教師のもっている感性が授業の中でぶつかり合うことも有効であるという指導助言をいただいているので、真摯に受けとめ共通理解をはかる中で、今後取り組んでいきたいと考える。

コミュニケーション能力の育成

低次元思考から高次元思考へと高めていくために、子ども同士の討議する場を設け集団思考させることが大切である。また、そのことによって活気あるエネルギーある授業を展開できると考える。そのために教材研究をより深め、子どもたちがどこでつまづかか想定し授業を考えていく必要がある。現在、子どもたちのコミュニケーション能力の育成ということでは今一つという状況であり、わからない子がわかっている子に対して、わかるまでつまづいて質問していくような学習展開としたいと考える。学び合い、励まし合い、高め合うという児童を育成することによって、本校の研究テーマを充実していくことができるのではないかと考える。

ノート指導

学習履歴としてのノート作りに取り組み始めることができた。授業の終わりに思ったこと、分かったことなど学習感想を書かせて、これに対して教師が返事を書くようにしていく。まだ一部の学年しか実践していないので全体に広め、さらなる充実をはかりたい。そして、1時間1時間の授業を大切に、授業を通して子どもの中に内なる教師を育てていくようにしたい。

朝の学習にかかわって

短い時間であるが、子どもたちの発達段階を考えてやる気をかき立てる工夫をすることにより、継続していくことができる。今後もプリントや漢字ノート、朝読書等々、いろいろなバリエーションを組み替えるようにし、子どもたちが負担に感じないで、楽しく続けていけるようにしたいと考える。また、朝学習に限らず知識の剝落に対する手だてを講じる。復習問題による定着率のチェックとふり返し学習の時間確保をめざす必要がある。

情報発信

授業づくりに重点をおいてきたため、情報発信としての活動の時間を十分確保できなかったため、早急に取り組んでいきたい。保護者への情報発信ももっと充実させたい。

学力等把握のための学校としての取組

* 児童の学習及び生活に関する意識調査（6月実施）
確かな学力の向上のためには「学ぶ意欲」「生活習慣」「コミュニケーション」が深く関わっていると考え。この3つの観点について児童の実態を的確に把握し、その後の指導に生かすために実施した。

* 保護者へ結果を提示し、意見交換する中で今後の方向付けについて検討した。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

* 研究会開催予定
日時 2004年10月29日（金）
場所 井尻小学校
対象 県下小中学校の教師
目的 小規模学校での学力向上のためのTTのあり方について

* 山梨県学力向上推進協議会ならびに峡東地区学力向上推進協議会への資料提供

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	1 5 年度からの新規校	1 4 年度からの継続校		
【学校規模】	6 学級以下 1 3 ~ 1 8 学級 2 5 学級以上	7 ~ 1 2 学級 1 9 ~ 2 4 学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T・Tによる指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	